

〈論文〉

心の病に寄り沿うということ

——高村光太郎と妻智恵子——

福田 周

はじめに

高村光太郎（以下、光太郎）は、明治生まれの彫刻家、詩人であり、大正・昭和にかけて活躍した。明治日本の代表的彫刻家である高村光雲を父とし、自身はフランスの彫刻家オーギュスト・ロダンに感化され、西洋造形思考と日本における伝統的造形手法を融合し、『鯨』や『裸婦坐像』などの作品を残す。また、『道程』に始まり、晩年においては太平洋戦争に文化人として賛同し活動した経緯を自己批判した『典型』といった詩集などがある。光太郎は常に自分の生き方を通して作品を制作する人であり、一個人の心の成長と苦悩が自身の芸術と深く結びついている。

ところで、光太郎の人生において、芸術家としての職業的葛藤と同等に、あるいはそれ以上に影響を与えたのは妻智恵子の存在であろう。智恵子が結婚後心の病にかかり、光太郎は妻の看病を通して様々な苦悩を体験する。しかし、それは同時に妻智恵子の存在が自身にとってかけがえのないものであることをより深く理解していく過程でもあった。智恵子亡き後、光太郎は智恵子との心の関わりを『智恵子抄』という詩集として発表する。

本稿では、この二人の関わりを振り返りながら、心の病とは何か、心の病にかかった人に寄り添い共に生きるということとはどのような体験となるのかということについて考えていきたい。

1. 高村光太郎と長沼智恵子

ここでは光太郎と長沼智恵子の出会いまでの過程を簡潔に辿っていく。その際、光太郎に関しては主に北川太一編の「評伝」『新潮日本文学アルバム 高村光太郎』（1984）と、湯原かの子著の『ミネルヴァ日本評伝選 高村

光太郎』(2003) から、長沼智恵子に関しては北川太一著『画学生智恵子』(2004a)、郷原宏著『詩人の妻 高村智恵子ノート』(1983) の内容を引用して要約していくこととする。

1.1. 高村光太郎

光太郎は、明治16年(1883年)東京下谷西町(現台東区)において、父光雲、母わかひの長男として生まれる。父光雲は江戸末期生まれの木彫師で、岡倉天心らの薦めで東京美術学校の彫刻科の教授となり、その後、明治期の日本を代表する彫刻家となった人物である。光太郎は、この職人肌のワンマンな父の家で自然と彫刻に触れて育ち、将来は自分も父の職を継ぐことを当たり前のこととして成長する。明治30年(1897年)光太郎は15歳で父の教える東京美術学校の生徒となり、彫刻科で父から直接の指導を受ける。19歳で彫刻科を卒業し、そのまま研究科に残り制作活動を続ける。22歳の折に、ロダンの彫刻写真を見て衝撃を受け、明治39年(1906年)に海外へと留学をする。ニューヨーク、翌年にはロンドン、その後パリでの滞在を経て、西洋文化に触れた光太郎は、親からの精神的自立を経験するとともに、日本人として、芸術家としてのアイデンティティの葛藤と劣等感もかかえる。特にフランスにおいて洗練された西洋文化と芸術そして自由という空気を体感する。しかし、同時にアトリエでのデッサンの習得において光太郎は絶望を感じる。

結局光太郎は、モデルを使って仕事をして、人種差別からくる不安のせいなのか、あるいは何かモデルと自分との間に乗り越えられない絶対的な亀裂があるのかと悩むようになり、「神経衰弱のように」になってしまう。ついに「ごみのようなモデルでもいいから、やはり日本人のモデルで勉強しなければ本當には行けない¹⁾」と思うようになり、挫折をし、明治42年(1909年)に帰国を決意する。帰国後、彼は伝統的な旧態依然とした美術に対する反抗を様々な形で試み始める。それは同時に父に対する反抗となって表出する。

また、芸術界における活動も戦闘的、反抗的なものとなり、いわゆるデカダンス²⁾の時代を送る。これに伴って、彼は彫刻だけでなく、評論、詩作、絵画など様々な表現形態を試みていき、芸術家は自分の感覚に従って自由に表現すべきだという信条を宣言する。その代表作が詩集『道程』である。ま

た私生活においても、デカダンス的な廃頹的生活を送るようになる。そして、明治44年（1911年）に長沼智恵子と出会う。

1.2. 長沼智恵子

長沼智恵子（以下、智恵子）³⁾は、明治19年（1886年）福島県安達郡由井村（現福島県二本松市）で、父今朝吉と母センの長女として生まれた。長沼家は地元の造り酒屋であり、母センは智恵子の祖父にあたる長沼次助の後添えの連れ子であり、今朝吉はセンと結婚して長沼家に養嗣子として入る。旧姓は斎藤であり、正式に長沼姓を名乗るようになったのは智恵子が小学校に入学したときからであった。父はきわめて温厚な人で、言葉少なく物静かに話す人だったようである。一方母は気が強く、子どもの教育については母が主導権を握っていたようである。

智恵子は、地元の尋常小学校に明治26年（1893年）6歳の時に入学する。小学校の頃から智恵子は成績がよく、常に1、2番であった。性格はおとなしかったが気が強い方であった。⁴⁾明治30年（1897年）に尋常科を卒業し、そのまま尋常高等小学校に進学し、そこでも極めて優秀な成績を取めている。当時の同級生は智恵子のことを責任感が強く、非常に思いやりがある人だったと述べている。⁵⁾どちらかというとおとなしく生真面目で、面倒見がよい長女的な性格であった。

成績が非常によかった智恵子は、明治34年（1901年）に由井尋常高等小学校を卒業後、福島高等女学校（現福島県立橘高等学校）に進学する。県下で唯一の女学校で、彼女は抜群の成績を取める。特に国語が得意であった。学科だけでなく、裁縫や絵も上手で、スポーツにも打ち込み、特にテニスが強くて、いつも試合になると勝っていたようである。その中でも絵画に関して、智恵子はこの高等女学校時代に強く関心を持つようになる。

一方、内気な性格はあいかわらずで、当時の同級生たちは一様にそのおとなしい性格を次のように語っている。「大声で笑うようなことは希で、いつもうつむきにしていた。友人と話すときは右手の甲を上にして口の下に持っていき、首をしならせるようなしぐさをする癖があった。」「勉強中に何かぶつぶつひとりごとをいっているの、なあに？と問い返すと、智恵子はただ黙って首を振るだけだった。」⁶⁾

明治36年（1903年）に智恵子は高等女学校を卒業し、上京して日本女

子大学校普通科予科に16歳で入学し、翌年家政学部に進学する。創設もない日本女子大学校は、平塚らいてうをはじめとする「あたらしい女」が通う、時代の最先端を切り開く活気あふれる場でもあった。智恵子は学内にある寮に住んでいたが、当時の同窓生が語る智恵子の様子は高校時代と変わらない。落ち着いていて口数の少ない、しかし興味のあることには非常な熱心さを持って取り組む学生であった。当時はテニスと自転車にのめり込み、誰よりもうまく乗りこなした。内気な性格は相変わらずであり、らいてうは「低い声で何をいっているのかわからないような、そして、1つのセンテンスをはっきりと喋れないような内気な感じの人でした。豊かな髪を、額やうなじにくずれおちるような結び方をして、全体の印象がまことにゆるやかな人でした。話をする時も人の顔を見ないでいつも下を向いているのです」と語っている。⁷⁾ 一方、大胆なこともして、飲食を禁じられている寮の部屋で、平気で盗み食いをし、先生に見つかっても臆することもなく応答し、逆に先生の方が慌てて退散してしまうこともあった。

2年次になると智恵子は突然選科課程に移ってしまう。彼女は、自分のしたいことが出来る道を選んだ。それは絵画である。明治40年(1907年)大学校を卒業後も智恵子は郷里に帰らず、そのまま東京に残って太平洋画会の研究所に通って洋画家としての道を歩き始める。研究所の人体部には二人の女性がいる、その一人が智恵子であった。男性ばかりの中で非常に人目を引いた。しかし、当時の男子生徒の印象は、「無口で誰とも親しまず、ただ静かに人体写生を続けていました。画架の間からのぞかせた着物の裾が、あだっぽく目につくといった女性的魅力は与えながら、智恵子にはそうした気風に触れる誰しも、気軽に近づく訳にはいきません。画に向かっては気むずかしく、時には筆を口にくわえ画面を消したり、首を曲げたなり考え込んでいる時もあります。人体描写が昼までで終わると、さっさと道具を片付けて例の無口さで帰って行きます⁸⁾」といったものであった。

明治41年(1908年)に、智恵子にとって大きな出来事が起こる。日本で最初の女流文学雑誌『青鞥』の表紙絵を描くことになったことである。これはらいてうが智恵子に依頼をして、明治44年の創刊号で実現することになる。智恵子は青鞥社の社員にはならなかったが、この挿絵によって無名の人から最先端を行く「新しい女性」の一人として世間から注目を浴びる人となる。

1.3. 光太郎と智恵子の出会い

画学生である智恵子が光太郎と初めて出会うこととなるのが、この明治44年（1911年）の12月末である。智恵子はこの年26歳、光太郎は28歳である。日本女子大学校の先輩の柳八重⁹⁾の紹介で、智恵子は光太郎の画室を訪問する。当時光太郎はすでに有名な芸術家であり、智恵子は当然光太郎の名は知っていた。翌明治45年（1912年）6月に光太郎のアトリエが完成した際に、その新築祝いとしてグロキシニアの大鉢を贈った頃から急速に二人の仲が発展する。智恵子はしばしば光太郎のアトリエに訪問して、「ただ私の作品を見て、お茶を飲んだり、フランス絵画の話を書いたりして帰ってゆく」ような関係であり、当時光太郎は智恵子の印象を「ひどく優雅で、無口で、語尾が消えてしまい、」¹⁰⁾とやはりその内気な性格を述べている。また智恵子は自分の作品を光太郎に見せたりしないので、何を描いているのか光太郎は知らない。

その後、大正元年犬伏崎に写生に来ていた光太郎は、そこで妹と友人の三人で遊びに来ていた智恵子と偶然一緒になる。そして二人はそこで同じ宿に泊まる。光太郎は当時の様子をこう語っている。

「宿の女中が一人必ず私達二人の散歩を監視するように付いて来た。心中しかねないと見えたらしい。智恵子が後日語る所によると、その時若し私が何か無理な事でも言い出すような事があつたら、彼女は即座に入水して死ぬつもりだったという事であつた。私はそんな事は知らなかったが、此の宿の滞在中に見た彼女の清純な気質と、限りなきその自然への愛とに強く打たれた。君が浜の防風林を喜ぶ彼女はまったく子供であつた。しかし又私は入浴の時、隣の風呂場に居る彼女を偶然に目にして、何だか運命のつながりが二人の間にあるのではないかという予感をふと感じた。彼女は実によく均整がとれていた。」¹¹⁾

その後、智恵子からの手紙が頻繁に来るようになり、翌大正2年（1913年）の夏には写生旅行として上高地に滞在し、その年に二人は婚約を交わす。大正3年（1914年）に結婚披露宴を開き、二人の生活が始まる。

2. 心の病との闘い—光太郎と智恵子の関わり—

2.1. 結婚当初

当時見合い結婚が一般的であった時代、二人は恋愛結婚をし、かつ婚姻届けを出さない自由な形態の同居生活を始める。光太郎31歳、智恵子28歳であった。二人は光雲が建ててくれたアトリエで暮らすことになる。光太郎は、昼間は彫刻をし、夜には生活費を稼ぐために原稿書きや翻訳に精を出した。智恵子は絵の勉強に打ち込んだ。アトリエという空間に二人きりで内閉し、極端に外との関係は薄れていった。金銭的には苦しかったが、智恵子はそういった経済観念に無頓着であり、貧乏を貧乏と感じないようであった。生活の足しにと絹糸をつむいだり、草木染をしたり、大正10年(1921年)ころには機織りを始めていた。派手な着物も着なくなり、家では飾り気のないセーターとズボンで過ごすようになった。¹²⁾ 光太郎は二人だけの生活の様子を次の詩に詠っている。

同棲同類

—私は口をむすんで粘土をいぢる。
—智恵子はトンカラ機を織る。
—鼠は床にこぼれた南京豆を取りに来る。
—それをカマキリは物干し網に鎌を研ぐ。
—蠅とり蜘蛛は三段飛。
—かけた手拭はひとりでじやれる。
—郵便物ががちやりと落ちる。
—時計はひるね。
—鉄瓶もひるね。
—芙蓉の葉は舌を垂らす。
—づしんと小さな地震。
油蟬を伴奏にして
この一群の同棲同類の頭の上から
子午線上の大火団がまつさかさまにがつと照らす。¹³⁾

まさに時間さえ止まった一心同体のひきこもり生活である。光太郎はこの時期長らく詩を書かなくなり、かわりに彫刻へと没頭する。一方、智恵子は光太郎の創作活動を支えるため、徐々に自分の創作活動を控えて家事に専念するようになっていく。

2.2. 智恵子の発症

智恵子はほとんど光太郎とのみの対人関係の中で暮らしていた。大正4年(1915年)の夏ごろ、智恵子は肋膜炎に罹り、それ以来体調不良が続くようになる。大正8年(1919年)には子宮後屈症¹⁴⁾手術で入院し、さらに肋膜炎の治療のために再入院している。大正11年(1922年)になると病態が悪化し、春ごろから郷里に戻って長期の静養を余儀なくされている。その後病状は回復し、二人の生活が戻る。智恵子は再び芸術家としての活動を開始しようとする。大正15年(1926年)40歳の智恵子は二階を改造して自家用のアトリエを作ってもらい、油絵の制作に力を入れる。母に向けて出した手紙にその思いが語られている。

何しろ自分で生活の力を得なければ、何が何でもだめですから。私は一生懸命仕事の為に命を打ち込むつもりです。人並みに出来なくても、苦しい生活でもそれは何とも思いません。質素にして働くことをよろこび、何かしらの仕事をして死にたい願だけです¹⁵⁾

大正15年(1926年)9月13日

再び絵の修行に戻った智恵子であるが、思うように絵が描けない。自分では自信をもって文展に出品した風景画が落選してしまい、それ以来どこの展覧会にも出さなくなってしまう、家にこもるようになってしまった。光太郎によれば、智恵子は自分の作品に完璧を求めてしまう傾向があり、常に作品は未完成のままになってしまい、またどうしても色彩の使用に不十分さが残ってしまっていたという。芸術家である光太郎はそれゆえに智恵子の絵の才能の限界を客観的に知っていた。時々智恵子は画架の前で一人涙を流していたようである。¹⁶⁾

画家としての未熟さへの絶望感を抱える智恵子に大きな不幸が重なる。大正7年(1918年)に父今朝吉が病死した後、家督を11歳下の弟敬助が継

いだが、急速に実家は傾き始める。智恵子は姉として実家のことを気に病み、母に手紙でたびたび励ましや具体的な財産問題への助言などを事細かにしている。一方、実家の窮状については夫の光太郎にはひた隠しに隠していた。しかし昭和4年（1929年）、智恵子の実家の商家が破産する。長沼家は一家離散し、智恵子は帰る家を失う。さらには実家の金銭的困難の問題も背負い込むことになる。当時の智恵子の苦しい心情が母宛ての手紙として残っている。

此度という今度は決して私に相談しないでください。……よしんば親や夫が百万長者でも、女自身に特別な財産でも別にしていない限り女は無能力者なのですよ。からだ一つなのですよ。まして実家は破産してしまい、母には別に名義上のものはない。自分はまして生活も手一ぱい。なかなか人の世話どころの身分ですか¹⁷⁾

昭和5年（1930年）1月20日

きのうは二人とも非かんしましたね。しかし決して世の中の運命にまけてはなりません。われわれは死んではならない。いきなれば、どこ迄もどこ迄も生きる努力をしましょう。……私もこの夏やります。そしていつでも満足して死ぬ程毎日仕事をやりぬいて、それで金もとれる道をひらきます。かあさん決して決して悲しく考えてはなりません。私は勇気が百倍しましたよ。やってやって、汗みどろになって一夏仕事をまとめて世の中へ出します。……力を出しましょう。私、不幸なかあさんの為に働きますよ、死力をつくしてやります。金をとります。いま少しまっていて下さい。決して不自由はかけません。もしまとめて金がとれるようになったら、みんなかあさんの貯金にしてあげますよ。決して悲観してはなりません。きょうは百倍の力が出てきました¹⁸⁾

昭和5年（1930年）7月29日

自身の職業的アイデンティティの葛藤と同時に、故郷の喪失と経済的問題が一気に重圧として智恵子を襲う。昭和6年（1931年）の夏、光太郎は紀行文の依頼のために岩手県三陸地方へ1か月余りの取材旅行に一人で出かける。これまで光太郎は智恵子を一人残して長く家を空けたことがなかった。残された智恵子の孤独は深刻なもので、光太郎の留守の間訪れた母や姪の春

子に、「わたし死ぬわ」と口走ったりしたようである¹⁹⁾。これ以降智恵子是不眠に悩まされるようになり、睡眠薬を服用するようになった。そして翌年7月15日に睡眠薬を多量服薬し、自殺を図る。

光太郎はまだ智恵子の精神的不調についてそれほど深刻にとらえておらず、この時は更年期による不調であろうと考えていた。同時に不安を感じたのか、光太郎は昭和8年(1933年)8月に結婚生活19年目にして智恵子を入籍した。そして智恵子の保養のために、二本松や塩原などへ温泉巡りの旅行をする。その保養の様子を後に記した詩が、次の「山麓の二人」である。

山麓の二人

二つに裂けて傾く磐梯山の裏山は
険しく八月の頭上の空に目をみはり
裾野とほく靡^{なび}いて波うち
芒^{すすき}ぼうぼうと人をうづめる
半ば狂へる妻は草を籍^しいて座し
わたくしの手に重くもたれ
泣きやまぬ童女のように慟^{どうこく}哭する
一わたしもうぢき駄目になる
意識を襲ふ宿命の鬼にさらはれて
のがれる途^{みち}無き魂との別離
その不可抗の予感
一わたしもうぢき駄目になる
涙にぬれた手に山風が冷たく触れる
わたくしは黙つて妻の姿に見入る
意識の境から最後にふり返つて
わたくしに^{すが}縫る
この妻をとりもどすすが今は世に無い
わたくしの心はこの時二つに裂けて脱落し
闇^{びき}として二人をつつみこの天地と一つになった。²⁰⁾

この詩で詠われたのは、旅行の折の智恵子の絶望的な自己崩壊の予兆であ

り、狂気の世界に転がり落ちていく智恵子をどうすることもできないでいる光太郎自身の無力感であった。事実その後は病状がさらに悪化していく。初めはしばしば幻覚が智恵子を襲い、智恵子はベッドでその幻覚を写生し、形や色の美しさに感激しながら光太郎に語った。その後11月頃、急速に意識混濁を起こしたのか、食事も入浴も光太郎の介助がないとできない状態に陥る。翌年3月頃には一時症状は好転して機織りを始めるようになったが、5月頃には再び悪化する。友人の水野葉舟に宛てた光太郎の手紙に当時の様子が語られている。

ちゑ子は一時かなりよくなりかけたのに最近の陽氣のせみか又々逆戻りして、いろいろ手を盡したが醫者と相談の上やむを得ず片貝の片田舎にゐる妹の家の母親にあづける事になり、一昨日送って来ました。小生の三年間に亙る看護も力無いものでした。鳥の啼くまねや唄をうたふまねしてゐるちゑ子を後に残して帰って来る時は流石に小生も涙を流した²¹⁾

昭和9年(1934年)5月9日

5月に入り、光太郎は智恵子を九十九里浜に住んでいた義母と義妹のもとに預けた。9月には光太郎の父光雲が病死し、その遺産を智恵子の療養費に充てる。週に1日は見舞いに通う光太郎だが、智恵子の症状は一向によくならず、意識混濁は脱したが、興奮状態は続き、「鳥と遊んだり、自身が鳥になったり、松林の一角に立って、光太郎智恵子光太郎智恵子と一時間も連呼したりするようになった。」²²⁾

光太郎はその智恵子の様子を次の詩に記している。

風にのる智恵子

狂つた智恵子は口をきかない
ただ尾長や千鳥と相図する
防風林の丘つづき
いちめんの松の花粉は黄いろく流れ
五月晴れの風に九十九里の浜はけむる
智恵子の浴衣が松にかくれ又あらはれ

白い砂には松露^{しょうろ}がある
わたしは松露をひろひながら
ゆつくり智恵子のあとをおふ
尾長や千鳥が智恵子の友だち
もう人間であることをやめた智恵子に
恐ろしくきれいな朝の天空は絶好の遊歩場
智恵子飛ぶ²³⁾

2.3. 自宅看護と中原綾子への手紙

12月末に光太郎は再び智恵子を自宅に呼び戻し、看護を始める。これ以降、光太郎の壮絶ともいえる智恵子の看護生活が始まる。当時の様子を示すものとして、文芸仲間の中原綾子²⁴⁾ への手紙が多く残されている。そこには智恵子の病の進行と、それに寄り添い懸命に看病する光太郎の苦悩が綴られている。

……父の死とつづいてちゑ子の病状悪化とで殆ど寧日なく今年も既になくならうといたして居ります、ちゑ子の狂気は日増しにわろく、最近では転地先にも居られず、再び自宅に引き取りて看病と療治とに盡してゐますが連日連夜の狂暴状態に徹夜つづき、尚それでも御詩集にまだ間に合ふやうでしたら書きますが、只今はそんな事で頭がめちやくちやになつてゐて何を書くかできません故あぶなくてお送り出来ません、……此を書いてゐるうちにもちゑ子は治療の床の中で出たための嘔語^{おうご}を絶叫してゐる始末でございませ、看護婦を一切受けつけられぬ事として一切小生が手当ていたしいり殆ど寸暇もなき有様です……²⁵⁾

昭和9年(1934年)12月28日

おてがみは小生を力づけてくれます、一日に小生二三時間の睡眠でも二週間ばかりやつてゐます、病人の狂躁状態は六七時間立てつづけに独語や放吟をやり、声かれ息つまる程度にまで及びます、拙宅のドアは皆釘づけにしました、往来へ飛び出して近隣に迷惑をかける事二度。器物の破壊、食事の拒絶、小生や醫師への罵詈^{ばり}、薬は皆毒薬なりとてうけつけません……女性の訪問は病人の神経に極めて悪いやうなのであなたのお話を聞く事が出来ません、手が^マミでお教へ下さるわけにはゆきませんか。……病人は発作が起こると、まるで憑きも

のがしたやうな、又神がかり状態のやうになつて、病人自身でも自由にならない動作がはじまります、手が動く首がうごくといったやうな。病人の独語又は幻覚物との対話は、大抵男性の言葉つきとなります、或時は田舎の人の言葉、或時は侯文の口調、或時は英語、或時はメチャクチャ語、かかる時は小生を見て仇討の如きふるまひをします²⁶⁾

昭和 10 年 (1935 年) 1 月 8 日

……もう足かけ三年小生は制作欲を殺してゐます、昭和七年七月十五日にちゑ子が突然アダリン自殺を企てた時以来のちゑ子の変調で小生の生活は急回転して勉強の道が看護の道に変わりました、研いた鑿のみや小刀皆手許から匿してしまいました、小生は木彫が出来なくなりました。……小生はちゑ子の一生を犠牲にしました。どうかして今夜ちゑ子を安泰にしてやりたいと願ひます、あなたの御親切じつを實じつにありかたく思います。あなたの同情は私に絶大の力を添へてくれます……今午後十時、ちゑ子は静かに就寝しました²⁷⁾

昭和 10 年 (1935 年) 1 月 11 日

ちゑ子は今日は又荒れてゐます、アトリエのまん中に吃立マツして独語と放吟の法悦状態に没入してゐます、さういふ時は食物も何もまつたくうけつけません、私はただ静かに同席して書物などをよんでゐます、仕事はまつたく出来ません、……²⁸⁾

昭和 10 年 (1935 年) 1 月 22 日

このように光太郎は生活や仕事一切を犠牲にして懸命に病者に寄り添ひ続ける。しかし、それはあまりにも絶望的な関わりであつた。当時の光太郎の心境を示す詩が次の「人生遠視」である。

人生遠視

足もとから鳥がたつ
自分の妻が狂気する
自分の着物がぼろになる
照尺距離三千メートル

ああこの鉄砲は長すぎる²⁹⁾

さらに光太郎は近隣への配慮からか、転居も視野に入れた自宅での看病を2か月余り続け、その困惑と智恵子の病状の様子を手紙で中原に伝えている。

……その後貸家さがしを毎日やつてみますが中々ありません、二三軒適當の家がありました皆断られました、何しろ少々近所迷惑な病人が住むのですから、周囲に空き地があること、新築のこと、風呂場のあること、その上経済上あまり家賃の不高くない家、自動車の通ずるところ、風景のあるところ、などといふ条件が多いので大変です、智恵子には未就職の弟が居て其の生活保障も小生がして居ます、此頃はちゑ子は興奮状態の日と鎮静状態の日とが交互に来てゐます、ひどく興奮して叫んだり怒つたりした日のあと急に又静かになり、大きに安心してみると又急に荒れ始めるといふ状態です、よく観察して見ますと智恵子の勝気の性情がよほどわざはひしてゐるやうに思ひます、自己の勝気と能力との不均衡といふ事はよほど人を苦しめるものと思はれます……³⁰⁾

昭和10年(1935年)2月8日

このように2か月余りの間、自宅での看病を続けたが、いよいよそれも限界を迎え、医師との相談の上、光太郎は智恵子を昭和10年(1935年)2月南品川にあるゼームス坂病院に入院させる。光太郎は見舞いの折の智恵子の様子を中原に語るとともに、入院させたことへの心の揺れも伝えている。

ちゑ子をも両三度訪ねましたが、あまり家人に会ふのはいけないと醫者さんがいふので面会はなるだけ遠慮してゐます。チエ子もさびしく病室に孤坐してひとり妄想の中にひたりこみ、相変わらず独語をくり返してゐる事でせう。先日あつた時わりに静かにはしてゐるものの、家に居る時と違つて如何にも精神病患者らしい風姿を備へて来たのを見て實にさびしく感じました、まはりに愛の手の無いところに斯ういふ病人を置く事を何だか間違つた事のやうに感じました、……もし治る事があつたら其は病氣自身の自然治療による事と思ひます、もう一度平常にかへつたチエ子を此世で見たいと切願ひます、……³¹⁾

昭和10年(1935年)3月12日

3. 統合失調症者としての智恵子

3.1. 統合失調症とは

精神科医町沢静夫は、智恵子の精神病理について40歳を超えてからの発症であることから、M.プロイラーの提唱した遅発統合失調症の可能性を指摘する。特にせん妄疾患に類似した急性興奮錯乱状態を示すタイプあるいは、E.ヤコービの提唱する遅発緊張病などにも当てはまる可能性があるとする。³²⁾ いずれにせよ、智恵子の病態は重篤で、統合失調症圏であることは間違いない。

統合失調症とは、陽性症状と呼ばれる幻覚、妄想、まとまりのない思考や異常な行動と、陰性症状と呼ばれる意欲欠如や情動表出の極端な現象、そして自閉行動が現れる精神病であり、様々なタイプが存在する。発症は通常思春期以降に起こることが多い。原因は今のところ不明であるが、生物学的原因による病的素因や中枢神経機能の脆弱性があり、その上に心理社会的ストレスが重なると発症につながるとする「脆弱性・ストレスモデル」が有力である。さらに発症を防ぐ防御因子や逆に病態を悪化させる憎悪因子との複雑な関係によって病が様々な経過を辿る。統合失調症の症状の推移は、まだ異常な精神症状が出現する前の「病前期」、神経症的症状や抑うつ気分がみられる「前駆期」、幻覚妄想などの統合失調症に特徴的な異常な精神症状が出現する「急性期」、その後は、症状悪化を繰り返し、やがて人格の崩壊に至る「慢性期」に移行する場合や、再燃をせず症状が消失する「寛解期」などがある。

3.2. 統合失調症の症状推移に沿った智恵子の経過

①病前期の智恵子

ここで統合失調症の症状の推移に沿って、智恵子の経過を辿っていくこととする。まず病前期であるが、病前性格として統合失調気質（シゾフレニー）があげられる。シゾフレニーは第一に自閉傾向を特徴として、性格的に内向的で非社交的、無口、控え目、生真面目、ユニーク、変り者。第二に精神的感受性の亢進を特徴として、性格的に内気、繊細、敏感、神経質、興奮性を示し、行動として人よりも自然や書物などを好む傾向。第三に精神的

感受性の低下を特徴として、性格上の従順、善良、温和、無頓着、鈍感があげられる。

智恵子はまさにこうした性格特徴を子供のころから持っていた。智恵子が常に対人関係を回避するのは、ある意味感受性の過敏さによる対人ストレスに対する脆弱性から自身を守るためであったのだろう。人が嫌いあるいは人に関心がないのではなく、自分が脅かされないで安心して関わられる相手を慎重に選んで行動している結果である。智恵子は身内との間では長女的なしっかり者で、身内の世話を積極的に焼いたりしている。つまり内弁慶なのである。友達もいないわけではなく、女子大時代もごく少数の親友と親密な関係を築けている。

一方で普通の人から見ればちょっと風変わりな行動をとることもあり、それが端から見ると魅力に感じられたりする。女子大時代の寮生活でのエピソードがそれをよく表している。また、彼女が打ち込む関心ごとの多くは、一人で黙々とこなすものであることが多い。集団で和気あいあいと交じり合う社交性に富んだ活動には縁遠い。絵画はその典型であろう。一人で黙々と画架に向かい、誰とも交わらず活動しても、誰もそれを奇異なこととしてとらえない。自転車にしても一人黙々と乗るだけであり、テニスでさえも彼女の場合はひたすらボールを打つことだけに集中し、テニスをすることが相手とのコミュニケーションに発展しない。学芸会においても、彼女は他の学生たちとともに制作にかかわり討論したり一緒に演技したりということではなく、舞台美術の制作を黙々とこなしている。参加しているようで常に輪から一人外れている。青鞥社との関わりも同様で、彼女は挿絵を描いただけであり、それをきっかけに青鞥社の女性運動のメンバーになったりすることもなかった。こうした彼女の特徴はシゾフレニーとしての性格傾向ゆえであるといえるし、彼女にとって非社会的であることは、安全な世界との関わりを約束してくれる大事な性質なのであろう。

しかし、ストレスへの脆弱性を有しているところに、外部環境からのストレスが加わるとそれが憎悪因子となる。智恵子の場合、女子大そして画学生時代までは学生であることが守りになって、外的ストレスを回避することが出来ていた。そして光太郎と出会うわけであるが、智恵子が積極的に光太郎にアプローチし、結婚に至る過程は急である。実は光太郎と犬吠埼で過ごす前に、実家で彼女の見合い話が持ち上がっていた。東京に上京している娘が

何の仕事もつかず、画学生としていつまでも過ごせるわけではない。当時としては見合い結婚が当たり前であり、結婚は家と家との関係で決まる。本人の意思は二の次である。いわば、彼女はこのとき人生の大きな岐路に立たされていた。それも自分の意志ではなく、外的プレッシャーを伴ってもたらされた危機である。

ところで、統合失調症の発病過程の研究で有名な精神科医のK. コンラートは、統合失調症の症状が発現する前の前駆期をトレマ期と呼び、それは俳優が舞台上がる前の緊張状態を示すような、緊張感、圧迫感、障壁感にさらされ、病者はそのために心理的に視野狭窄に陥り、そこから不安感、抑うつ感、そしてにっちもさっちもいかない窮地に立たされたという閉塞感を感じるという。³³⁾ 精神科医の中井久夫はこの状態を「焦り」「無理」の時期ととらえ、焦りに駆り立てられ、その状況から一気に抜け出すために無理な行動や判断をし、ますます窮地に陥っていくとする。³⁴⁾

智恵子もまた望まぬ結婚話によって、画学生という自分の安心できる世界を消失するという窮地に立たされる。普段は内気で控え目で他者と関わることに消極的な智恵子が、この窮地を脱するために必死に光太郎へ接近したとすれば、智恵子の積極的な姿勢も理解できる。彼女は焦っていたのであろう。幸い光太郎が智恵子を受け入れたことによって、智恵子はこの窮地から脱出することが出来た。光太郎との結婚生活は智恵子にとって親和性のある自閉的世界を保証してくれた。不必要な対人関係や社会的なストレスに晒されることなく、安心できる他者と安定した世界に没入できるからである。

②前駆期の智恵子

しばらくは無理をせず、光太郎の妻として生きていた智恵子であるが、再び発症のリスクとなる憎悪因子が忍び寄ってくる。それは主にふたつある。ひとつは大正15年(1926年)40歳のころから再び智恵子が本格的に絵画活動を開始したことである。つまり画家という仕事人として独り立ちするという大きな決断である。それは当然ストレスを伴う過程である。画家として認められるには外からの客観的な評価に耐える結果を出さなければならない。当然そこには「焦り」と「不安」が過度に生じる。このようなライフイベントが、智恵子にとって大きなプレッシャーとなったことは想像に難くない。事実彼女は展覧会への出品をするが、落選したことによって大きく心が

傷つく。ストレスに対し脆弱なのである。

ふたつめの憎悪因子は昭和4年（1929年）に智恵子の実家が破産したことである。一家離散し、智恵子は帰る家を失ったばかりか、実家の金銭的困難の問題も背負い込むことになる。この家族内のストレスが一番大きな引き金となったのであろう。智恵子はこうした外的ストレスに対して、何とか自分の力で解決しようとして「無理」を重ねる。さらにこうした身内の不祥事を恥と感じたのか、あるいは迷惑を他人にかけたくない一心であったのか、夫である光太郎にひた隠したことが「無理」を増幅させる。たぶん「焦り」が「焦り」を呼び、精神的余裕がなくなり、結果として視野狭窄に陥り、自分が画家として独り立ちすることで一挙にすべてを解決するしか道がないと思いつめてしまったのであろう。そうした前駆期の「焦り」と「無理」の様子が、上記の自殺未遂する前の昭和5年（1931年）の母に宛てた手紙の中によく表れている。

実はこのふたつの憎悪因子は連続したもので、つまり実家の崩壊という危機的因子を何とか自分で解決しようとして画家になることを再び目指したのであろう。もし、実家が安泰であったならば智恵子は発症せずに一生を過ごすこともありえたのではないか。

③急性期の智恵子

にっちもさっちもいかない窮地に陥った智恵子は、徐々に抑うつ気分や不眠などの精神症状が出始め、さらに光太郎の長期の不在という環境の憎悪因子が、追い打ちをかける形で智恵子を襲う。コンラートはこの発病寸前の状況に起こる危機感を「ただならぬ気配」、「何かおかしい」といった妄想気分や妄想知覚で説明している。³⁵⁾そして、出口のない状況を打開する方法として、智恵子は自殺未遂をする。張り詰めた緊張の糸が切れたように、これ以降、彼女は急性期の状態へと移行していく。東北への保養旅行の折の詩「山麓の二人」の一節、「泣きやまぬ童女のように慟哭する——わたしもうぢぎ駄目になる」とはまさにこの妄想気分であり、統合失調症の発症前に体験される世界没落体験であったのであろう。こうした智恵子の発症の様子を光太郎は次の詩に記している。

あ
値ひがたき智恵子

智恵子は見えないものを見、
聞こえないものを聞く。

智恵子は行けないところへ行き、
出来ないことを為る。

智恵子は現身^{うつしみ}のわたしを見ず、
わたしのうしろのわたしに焦がれる。

智恵子はくるしみの重さを今はすてて、
限りない^{こうぼく}荒漠の美意識圏にさまよひ出た。

わたしをよぶ声をしきりにきくが、
智恵子はもう人間界の切符を持たない。³⁶⁾

以降、智恵子は緊張病状態と呼ばれる意味連続性の消失、極度の緊張と興奮、混迷、解体へと突き進んでいく。この発症過程は不可逆的であり、了解不能の狂気の世界へと智恵子は落ち込んでいく。それに対して光太郎の「山籠の二人」の一節、「わたくしは黙つて妻の姿に見入る 意識の境から最後にふり返つて わたくしに縋る この妻をとりもどすすが今は世に無い」という絶望感、そしてこの「値ひがたき智恵子」の詩で「わたしをよぶ声をしきりにきくが、智恵子はもう人間界の切符を持たない」と詠った光太郎の心情は、発症過程の不可逆性に対する彼女と、そして光太郎自身の無力感を表しているのではないであろうか。

4. 心の病に寄り添うということ

4.1. 急性期における寄り添い

急性期における激的な症状の出現の様子は、上記の光太郎の中原に宛てた手紙の中によく表現されている。当時は統合失調症に対する薬物療法や有効な科学的治療方法がなかったこともあり、自宅での看護であっても入院看護

であっても、治療としてはそれほどの違いはなかったであろう。ただし放っておけば自傷他害の危険があり、常に見守りが必要である。光太郎はそれを一人で2か月近く行っている。当然一人では限界があり、その後智恵子は入院となるが、光太郎の智恵子への接し方は、統合失調症の急性期における看護の姿勢としてある意味正しい。

外出する際は家中を締め切り釘つけて出かけたというエピソードは、一見するとむごいことのように思えるが、急性期の患者にとって一番安全な守りとは物理的な自閉状態を作り出すことである。病院ではそれは閉鎖病棟あるいは保護室と呼ばれる看護空間となる。つまり自らを傷ついたり他者に危害を加えたりしてしまわないように、この急性期では強力な枠で囲って患者を保護する必要がある。光太郎も鑿や小刀など危険なものは隠し、智恵子の身を守っている。そのために光太郎自身は仕事ができなくなるのではあるが。

また、興奮状態のときには言い聞かせても無理であるし、無理やり止めようとしてもかえって興奮状態が憎悪することのほうが多い。中井は、興奮状態にある患者が放歌高吟し誇大的な話をする時も、それを否定したりからかったりすることは控えるべきであり、それよりも病者に接する態度として、シュビング的な関わりが必要であるとする。³⁷⁾ シュビング的関わりとは「母性性」による寄り添う姿勢であり、シュビングが統合失調症者との関わりの中で発見した「基本的信頼感」をベースとした寄り添いである。中井はこの母性性を、リルケの「マルテの手記」で母親が暗闇におびえる子供に「怖がることはない。暗いのはお母さんだからね」と静かに語りかける、そうした母の姿を指すという。³⁸⁾

智恵子の「アトリエのまん中に^{ママ}吃立して独語と放吟の法悦状態に没入してゐます、さういふ時は食物も何もまつたくうけつけません」という状況において、光太郎は「私はただ静かに同席して書物などをよんでゐます」と手紙に記している。こうした態度こそがシュビング的関わりであろうと思われる。

それでは治療者としてまったくの素人の光太郎が、どうしてこうした態度を身につけることができたのであろうか。ひとつは智恵子との二人きりの自閉生活において、どのような態度が本人にとってプラスになるのかということをも肌で感じ取り、自然に身につけたということが想像できよう。さらに、

光太郎自身がこうした「母性」に親和性をもともと持っていたこともあるのではないかと。湯原は次のような光太郎の母への思い出を著書の中で紹介している。

私は母の暖かい乳くさい懐の中で蒸されるようにして育った。母は無学であったから私をあやすにもただ祖先伝来の子守歌を繰り返すほかに術がなかった。だがあの「坊やはいいい子だ、ねんねしな」の無限のリフレインの何と私の心身を快くしてくれたことだろう。私は今でもその声の和らかさと軽く背中を叩かれる時の溶けるような安心さとを忘れない。³⁹⁾

こうした全身を包み込み、まるごと安心感を与えてくれる関係こそが「基本的信頼感」と呼ばれるものの源泉である。光太郎は母との関係の中でそれを実感として身につけている。

4.2. 心の病に寄り添うということと創作活動

入院後の智恵子は、症状が激烈な急性期の状態を抜け、徐々に慢性期に移行していく。光太郎が感じた「入院後の精神病患者らしい風姿を備へて来た」というのは、幻覚、妄想、自我障害などの活発な症状が徐々に消失し、その背景に隠れていた感情鈍麻や積極性の低下の方が目立つようになり、極端な常同的生活行動の固着が特徴となる、慢性期特有の姿のことを指すのであろう。智恵子が時に症状の再燃を繰り返し、一進一退の状態が続く中、光太郎は智恵子を見舞いを続けている。そして光太郎は病院への見舞いの折、智恵子に千代紙をもっていくようになる。その理由として、光太郎は次のように語っている。

精神病患者に簡単な手工をすすめるのはいいときいたので、智恵子が病院に入院して、半年もたち、昂奮がやや鎮静した頃、私は智恵子の平常好きだった千代紙を持って行った。訪問するたびに部屋の天井から下がっている鶴の折り紙がふえて美しかった。そのうち、鶴の外にも紙燈籠だとか其他の形のものがつくられるようになり、中々いじょう意匠をこらしたものがぶら下がっていた。⁴⁰⁾

絵画、音楽、編み物など創造的活動を通して回復を促進する療法は、大き

く生活療法に位置づけられる。生活療法は、科学的効果があるというよりも、こうした創作活動や生産活動を通して、他者とのコミュニケーションを図り、社会復帰に向けての準備を整えることにその治療的意義がある。例えばただ絵を描けばよいということではない。絵は他者とのコミュニケーションのための媒介に過ぎず、その媒介を通して他者と了解可能な情緒的共有体験をし、相互に交流しあうことが可能となるという点で有効なのである。智恵子もまた慢性期に入って少し余裕が生まれたのであろうか、自然と折り紙を始めている。

昭和12年(1937年)1月から看護婦となっていた智恵子の姪の春子が、病院で智恵子に付き添うようになる。智恵子はいつ頃からかはっきりしないが、色紙や様々な紙を使って切り抜き絵を制作するようになる。風邪を引いたり熱を出したりするとき以外は、毎日「仕事」をするといって切り紙細工をするようになった。⁴¹⁾ 春子はこの制作をじかに見ている、その様子を次のように語っている。

朝食がすんでしまうと一日の紙絵の製作がはじまる。押入の前にきちんと坐り、おじぎをしながらいろいろの色紙、アラビヤゴム糊、七cmほどの長さの先の反ったマニキア用の鋏、紙絵製作の素材道具を静かに取り出しはじめる。今日はどんなものをおつくりなさるのかと思うけれども、そばへ行ってみたりすると、ひどくお叱りなさるので、少し離れてチラリと見るくらいである。院長先生はじめ諸先生にも絶対にお見せしないので、伯母が入浴のいり、急ぎでお目にかけてたりした。その他のかたにはなおさら見せなかった。……こうして紙絵は一枚一枚大切に押入へしまわれて、伯父さまのおいでになられた時だけお見せするのであった。⁴²⁾

光太郎はこの智恵子の切り抜き絵に驚き、感嘆する。折鶴から飛躍的に進歩した作品は芸術作品となり、はじめは一枚の紙で一枚を作る単色のものがあったのが、だんだんと色調の配合や色量の均衡、付置の比例など微妙な神経が働いて、より複雑に重ね貼りなど技巧を凝らす作品へと変化していく。⁴³⁾

光太郎はこの切り抜き絵を「ゆたかな詩であり、生活記録であり、たのしい造型であり、色階和音であり、ユウモアであり、また微妙な愛憐の情の訴

でもある」と述べている。⁴⁴⁾ 智恵子はその作品を光太郎にだけ見せ、光太郎がそれを鑑賞することを楽しみに待つようになる。春子は作品を光太郎に見せる時の智恵子の様子を、次のように語っている。

叔母は押入から丸い手鏡をとり出し、一人で髪をとかしてちよつとのぞき、みだしなみをととのえる。そしてきれいな座布団を出しておく。まもなく伯父さまがいらっしやって事務所へ会計をすませる。私は伯父さま御持参の大きな風呂敷包を持ってさきに病室にゆく。

ほどなく伯父さまが入っていらっしやった。

「御機嫌よう」。

叔母は、それはそれは嬉しそうなお顔をなさって伯父さまの大きなお膝にだかれる。私はまごついてそうっと廊下にぬけだした。

風呂敷包をとくと、様々な色紙、京花紙、半紙、オーデコロン、オリンピックのケーキやクラッカー、ビスケットの数々。そのほかお願いしておいた品々が出てくる。三人でおいしくケーキを頂いて、伯母は押入からうやうやしく紙絵作品を出してお目にかける。

「ほう。」

と伯父さまは美しさに驚かれながらごらんになる。そばで叔母は目を細めて嬉しげになんどもなんどもおじぎをしては伯父さまをみていられる。……⁴⁵⁾

光太郎もまた、自分に絵を見せる智恵子の恥ずかしそうなうれしそうな顔が忘れられないと語り、そこに健康に生きる智恵子の姿を見出している。⁴⁶⁾

昭和13年(1938年)になると、智恵子は長らく患っていた結核の進行が進み、夏には38度を超える熱が続いたが、37度台の時には切り抜き絵の制作を続けていた。しかし、同年10月5日の夜、自分で整理してまとめておいた切り抜き絵を光太郎に渡し、光太郎に看取られながら息を引き取る。享年53歳であった。

中井は統合失調症の患者が慢性期に入り、そこで「画を描くことをきっかけとして治療のヤマ場というか分水嶺となることのほうが実際には多い」⁴⁷⁾と述べ、このきっかけがなければ回復期に入れられないことも多いという。また、絵を描くことが重要なのではない点として、「孤独な環境で一人で描い

ている画は壁に向かっての一人ごとであり、治療の場で描く絵はメッセージであり、「語り」⁴⁸⁾であるという。つまり、絵を描くにしても、それが他者に共有され、何らかのメッセージ性があり、それが了解可能な形で伝わり拘留されて初めて、治療的であるということであろう。

このような治療的場で共同作業がなされる創造的活動は、中井によれば「焦り」の環境では生まれず、「ゆとり」があって初めて取り組めるという。⁴⁹⁾ このゆとりの中で自由に造型する作業とは、光太郎の感じている智恵子の「たのしい造型」に通ずるものであろう。光太郎はここでも治療的態度として適切な姿勢を自然と身につけている。ただ審美的見地から作品のみを解釈するのではなく、その作品に込められた思いや共有してほしい時間と空間を保証して守り手となることが、病者の隠れていた健康な心の機能を再び取り戻す土台となっていく。智恵子の場合もその回復の兆しが見えつつあったが、残念ながら同時に進行していた結核によって、道半ばでこの世を去ることとなった。

おわりに一心の病に寄り添う人に寄り添うこと

以上のように、光太郎は統合失調症という心の病を抱える妻に対して、ほぼ一貫して治療的な関わりを続けてきたと見てよいであろう。しかしそれは身体的、社会的、そして精神的にも相当の負担であったことは想像に難くない。

ところで自宅看護の苦労の中、光太郎を精神的に支えたもののひとつに中原綾子への手紙があると思われる。中原から光太郎への返事の手紙は公にされていないためわからないので、中原が実際にどのような言葉かけを光太郎にしたのかは不明であるが、光太郎からの手紙の内容から察するに、光太郎にとって精神的な支えがそこにあったと思われる。

光太郎は、当時妻の病気のことを対外的には公にしていない。妻の病気を公にしたのは妻の死後である。自宅看護の折は看護にかかりつきりであり、そもそも仕事自体が出来ない状態であった。光太郎は手紙をこの時期に他の者にも出しているが、智恵子の病状を記したものは、中原以外には智恵子の母に宛てたものだけである。しかも、智恵子の母に宛てた手紙の内容は、智恵子の看病に関する具体的な助言や必要なものの連絡に終始していて、看護

に関する苦しい胸の内は一切明かしていない。中原にのみ、かなり長文の手紙で光太郎自身の苦悩を率直に書いているのである。なぜであろうか。

中原と光太郎の関係はそもそも文芸仲間であり、先輩後輩の間柄で、中原が光太郎を師と仰ぐ関係であった。中原は自身の詩集を刊行するにあたって、光太郎にその序文を依頼している。そのやり取りの手紙の延長で、徐々に光太郎が中原に智恵子の病状を訴えるようになっていく。

心の病を抱えた家族を持つ人たちは、その戸惑い、怒り、絶望感などを病者本人にぶつけるわけにもいかず、また他の家族にそれをぶつけるわけにもいかない。ましてや極めて個人的な苦悩を、仕事関係の者に吐露するわけにもいかない。また、治療者に対しても、まずは本人の治療が優先で、どうしても自分の悩みは二の次となり、看護をする家族は、自分が我慢して病気の家族を頑張って支えなければという思いに駆られるのが普通であろう。光太郎もまたそうであったと推測される。

そうした時、かえって第三者にこそ本音を出せるということは自然なことではないであろうか。それは利害関係があまりないような、何を話してもそれが何か直接影響を及ぼすような関係ではない相手という意味での第三者である。光太郎にとって中原はちょうどよい距離の人物であったのではないか。全く知らない相手ではなく、それまでの付き合いから自身にとって安心して関わられる相手であったのかもしれない。

さらに、中原との関係は手紙のみのやり取りに終始している。智恵子を見舞いに行こうとする中原の申し出を光太郎は断っている。それは見知らぬ来訪者が智恵子に対して精神的に脅威を与えてしまうという意味でもあるし、実際には看護でそのような余裕すらないということもあったろう。もし、直接会うような関係に発展していたら、中原の存在は違う意味を帯び、それは光太郎と智恵子にとって有害な結果をもたらしていたであろう。

手紙という限定された枠においてのみ心情を表出し、そしてそれを秘密として保持することができた点が、心理療法的な構造枠を光太郎と中原二人の間に自然と成立させていたといえる。つまり中原は光太郎の心理療法における治療者としての役割を担ったともいえる。光太郎が智恵子に寄り添ったのと同様に、中原もまた光太郎の苦悩に寄り添ったのであり、この二重構造のシュビング的関わりが、光太郎の智恵子への関わりを支えたといえるかもしれない。光太郎と中原の関わりの意味を考えることで、心の病を抱える人へ

の家族には、それを間接的に支える場が必要であることを、心の援助に携わる者に再認識させてくれるのではないであろうか。

注

- 1) 高村光太郎 (1995a) 312 頁参照。
- 2) *décadence* : 虚無的・退廃的な傾向や生活態度。19 世紀末の懐疑思想に影響を受けて、既成の価値・道徳に反する美を追い求めた芸術の傾向。フランスのボードレー、バルレーヌ・ランポー、イギリスのワイルドなど。退廃派ともいう (『大辞林』第 3 版)。
- 3) 戸籍上はチエ。本人は「ちゑ」あるいは「智恵」と表記し、地元での通り名は「ちゑ」である。東京に上京後、「智恵子」を名乗った。郷原宏 (1983) 10 頁参照。
- 4) 郷原宏 (1983) 18 頁参照。
- 5) 郷原宏 (1983) 22 頁参照。
- 6) 郷原宏 (1983) 33 頁参照。
- 7) 郷原宏 (1983) 49 頁参照。
- 8) 北川太一 (2004a)、60 頁参照。
- 9) 画家柳敬助の夫人。夫の敬助と光太郎はニューヨーク時代からの友人。
- 10) 高村光太郎 (2005) 143 頁参照。
- 11) 高村光太郎 (2005) 143-144 頁参照。
- 12) 湯原かの子 (2003) 153 頁参照。
- 13) 昭和 3 年 8 月。高村光太郎 (2005) 80-81 頁参照。
- 14) 子宮頸軸が後方に傾いているものを後屈という。通常の子宮は前傾前屈が多いが、後傾後屈もかなりの頻度で見られる。以前は子宮後屈症として腰痛、不妊症の病因としてかなり病的意義を認め、治療としてペッサリーの装着、手術などが行われたが、現在では病的意義は少ないといわれ、診断として子宮後屈症とすることはほとんどない (世界大百科事典第 2 版)。
- 15) 湯原かの子 (2003) 164 頁参照。
- 16) 高村光太郎 (2005) 136 頁参照。
- 17) 湯原かの子 (2003) 174 頁参照。
- 18) 湯原かの子 (2003) 174 頁参照。

- 19) 高村光太郎 (2005) 150 頁参照。
- 20) 昭和 13 年 6 月。高村光太郎 (2005) 90-91 頁参照。
- 21) 高村光太郎 (1995c) 123 頁参照。
- 22) 高村光太郎 (2005) 151 頁参照。
- 23) 昭和 10 年 (1935 年) 4 月。高村光太郎 (2005) 84-85 頁参照。
- 24) 歌人。明治 31 年生まれ。与謝野晶子に師事して、第二期「明星」で活躍した。戦後に「すばる」を復刊し主宰した。昭和 44 年死去。享年 71 歳。
- 25) 高村光太郎 (1995b) 127 頁参照。
- 26) 高村光太郎 (1995b) 128 頁参照。
- 27) 高村光太郎 (1995b) 129-130 頁参照。
- 28) 高村光太郎 (1995b) 130 頁参照。
- 29) 昭和 10 年 (1935 年) 1 月。高村光太郎 (2005) 83 頁参照。
- 30) 高村光太郎 (1995b) 131 頁参照。
- 31) 高村光太郎 (1995b) 132 頁参照。
- 32) 町沢静夫 (1979) 『パトグラフィ双書 12 高村光太郎—芸術と病理』金剛出版 238 頁参照。
- 33) コンラート, K. (1994) 『分裂病のはじまり』岩崎学術出版社、65-94 頁参照。
- 34) 中井久夫 (1985) 「精神分裂病状態からの寛解過程」『分裂病』岩崎学術出版社 131-136 頁参照。
- 35) コンラート, K. (1994) 88-93 頁参照。
- 36) 昭和 12 年 (1937 年) 7 月。高村光太郎 (1956) 『智恵子抄』新潮社、88-89 頁参照。
- 37) 中井久夫 (1985) 144 頁参照。
- 38) 中井久夫 (1985) 144 頁参照。
- 38) 湯原かの子 (2003) 『ミネルヴァ日本評伝選 高村光太郎—智恵子と遊ぶ夢幻の生—』ミネルヴァ書房、5 頁参照。
- 40) 高村光太郎 (2005) 156 頁参照。
- 41) 高村光太郎 (2005) 156 頁参照。
- 42) 宮崎春子 (1959) 「紙絵のおもいで」『高村光太郎と智恵子』草野心平編、筑摩書房、309 頁参照。
- 43) 高村光太郎 (2005) 157 頁参照。
- 44) 高村光太郎 (2005) 152 頁参照。
- 45) 宮崎春子 (1959) 309-310 頁参照。
- 46) 高村光太郎 (2005) 158 頁参照。
- 47) 中井久夫 (1998) 『中井久夫最終講義 分裂病私見』みすず書房、11 頁参照。
- 48) 中井久夫 (1998) 11 頁参照。
- 49) 中井久夫 (1998) 24 頁参照。

引用参考文献

- コンラート, K. (1994) 『分裂病のはじまり』(山口直彦, 安克昌, 中井久夫訳) 岩崎学術出版社 (Klaus Conrad, *Die beginnende Schizophrenie-Versuch einer Gestaltanalyse des Wahns*, George Thieme Verlag, Stuttgart 1958. 第2版 1966)。
- 北川太一 (1984) 「評伝」『新潮日本文学アルバム 8 高村光太郎』北川太一編、新潮社。
- 北川太一 (2004a) 『画学生智恵子 (高村光太郎ノート)』蒼史社。
- 北川太一 (2004b) 『智恵子相聞—生涯と紙絵 (高村光太郎ノート)』蒼史社。
- 草野心平 (1959) 『高村光太郎と智恵子』筑摩書房。
- 町沢静夫 (1979) 『バトグラフィ双書 12 高村光太郎—芸術と病理』金剛出版。
- 松島光秋 (1977) 『高村智恵子—その若き日』永田書房。
- 松本和男 (2002) 『歌人 中原綾子』中央公論事業出版。
- 中井久夫 (1985) 「精神分裂病状態からの寛解過程」『分裂病』岩崎学術出版社、115-180 頁。
- 中井久夫 (1998) 『中井久夫最終講義 分裂病私見』みすず書房。
- 大熊輝雄 (2013) 「第8章統合失調症, 妄想性障害と気分障害」『現代臨床精神医学』改訂第12版、現代臨床精神医学第12版改訂委員会編、326-363 頁。
- 郷原宏 (1983) 『詩人の妻—高村智恵子ノート』未来社。
- 高村光太郎 (1956) 『アトリエにて』新潮社。
- 高村光太郎 (1995a) 『高村光太郎全集』第十巻、北川太一監修、筑摩書房。
- 高村光太郎 (1995b) 『高村光太郎全集』第十四巻、北川太一監修、筑摩書房。
- 高村光太郎 (1995c) 『高村光太郎全集』第十五巻、北川太一監修、筑摩書房。
- 高村光太郎 (2005) 『智恵子抄』百十九刷、新潮文庫。
- 高村智恵子 (1996) 『智恵子 紙絵の美術館』芳賀書店+有限会社ホワイトポイント編、芳賀書店。
- 湯原かの子 (2003) 『ミネルヴァ日本評伝選 高村光太郎—智恵子と遊ぶ夢幻の生—』ミネルヴァ書房。

Living Close to Mental Illness: Kotaro Takamura and His Wife, Chieko

by Amane FUKUDA

Born in the Meiji era, Kotaro Takamura was a sculptor and poet who was prominent during the Taisho and Showa periods. His wife, Chieko, had a significant influence on his struggle to become a professional artist.

After they got married, Chieko developed schizophrenia and even as her condition worsened, he nursed her alone at home. During this time, he was largely unable to work, and he faced a difficult time physically, socially, and mentally. During this period, he exchanged letters with one of his colleagues in the arts, Ayako Nakahara. At that time, no one in his professional life knew about his wife's illness, but in these letters, he writes in detail about the pain with which he was dealing. This correspondence served as an outlet for his feelings of loneliness, for him to express the difficulties in taking care of a mentally ill person, and it provided him mental support. After Chieko's death, he published a collection of poems about his relationship with her.

In this article, the relationship between Kotaro and Chieko is reviewed. In particular, how family members are able to remain close to a person suffering from schizophrenia and how each can move forward in one's own life in such situations is examined.